

蘇軾の「南行集」の詩について

著者	横山 伊勢雄
雑誌名	漢文學會々報
巻	32
ページ	39-51
発行年	1973-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00149226

蘇軾の「南行集」の詩について

横山 伊勢雄

蘇軾の詩で現存する最も早い時期の作品は、彼が二十四

歳の時のものである。嘉祐四年（一〇五九）十月、母程氏の喪があけて、蘇軾は父の洵、弟の轍と共に一家で都（今の開封）へと旅立つた。この旅は蜀の眉山から南下して長江を船で下り、江陵から北上して都に至る南廻りのコースである。父子三人は嘉州から江陵までの船旅の途中で互いに詩を唱和し、江陵の地でそれらをまとめて「南行集」を編んだ。この「南行集」自體は傳わっていないが、蘇軾の書いた序文と彼の詩はほぼそのまま現存している。

これらの詩は、同じ素材について父子あるいは兄弟で互いに唱和したいいわゆる題詠の作品がほとんどであり、限定された場及び題目で作られたものであるために、想を練り字句を選ぶという作詩の過程を経ずに、即發の氣合と才で作りに上げたものという限界が認められる。また、最初期の作品として習作的な性格が濃く、蘇軾の全詩業から見れば

小さな存在でしかない。そのためか蘇軾の詩を論ずる場合にもあまり言及されていない。

しかし、觀點を蘇軾一個の詩業の形成とその展開の検討という面に移すならば、現存する最初の作品群として、詩人蘇軾のいわば原點を示すが故に、この「南行集」の詩は無視できない存在であると私は考える。またこの集のため書かれた序文も、蘇軾の基本的な文學觀が示されていて、やはり見のがせない文章である。

よつて本論文では、まず序文を検討して蘇軾の文學觀を探り、次に作品の検討を通してとくに彼の後の作品と連續していく表現及び構成上の特色を考察する。「南行集」の詩一つ一つを分析することを目的とするものではないことをあらかじめ斷わておく。

二

まず、「南行前集敘」^{〔註1〕}の全文を次に引く。

夫昔之爲文者、非能爲之爲工。乃不能不爲之爲工也。

山川之有雲霧、草木之有華實、充滿勃鬱而見於外。夫雖欲無有、其可得耶。自少聞家君之論文、以爲古之聖人有所不能自己而作者。故軾與弟轍爲文至多、而未嘗敢有作文之意。

己亥之歲、待行適楚。舟中無事。博奕飲酒、非所以爲閨門之歡。山川之秀美、風俗之朴陋、賢人君子之遺跡、與凡耳目之所接者、雜然有觸於中、而發於詠歎。蓋家君之作、與弟轍之文皆在。凡一百篇、謂之南行集。將以識一時之事、爲他日之所尋繹。且以爲得於談笑之間、而非勉強所爲之文也。時十二月八日、江陵驛書。(蘇東坡集「卷二十四」)

便宜上、前後二段に分けて引いた。前段に蘇軾の文學觀が示され、後段に「南行集」が成つた間の事情が述べられている。

まず蘇軾は言う、「昔の人が文章を作つたのは、上手に書くために文が巧みになつたのではなく、それこそそう書かざるをえなくて(結果として)巧みになつたのである」と。このことを蘇軾は好みの筆法である比喻をもつて更に強調する。それはたとえば「山水には雲や霧があり、草木に花や實があるのは、内部に充滿したエネルギーが自然と外に現われ出たのであるように、外に現われないまままでい

ようとしても、はたしてそれは可能であらうか。」内部の充滿が自然と外に溢れ出るように、文章行爲も一種の必然性によるから、「古の聖人は書かずにおれなくなつて著述をしたのだと考え」てきたし、彼等兄弟の多くの文も「これまで決して文章を作るために書こうという氣持をもたない」で書かれたものであると蘇軾は言う。

これをまとめれば、文章は意識的に技巧をこらして作りあげるいわば作意の強いものであつてはならず、自然に書きたくなつて書いた文つまり内部の充實が自然に流露して文となつたものでなければならぬとする論である。これは技巧に専心し裝飾的な文辭を連ねる美文派と對極的な考え方に立つ文學觀であり、内面の充實が外在化されずにおかないという文學の自發性を重んずる立場である。

蘇軾が右の文學觀を生涯一貫して持ち續けたことは、次の文章によつて知ることができる。次に引いたのは元符三年(一一〇〇)、謝舉廉が詩文を寄せてきた返事的一部分である。

所示書教及詩賦雜文、觀之熟矣。大略如行雲流水、初無定質、但常行於所當行、常止於所不可不止、文理自然、姿態橫生。孔子曰、言之不文、行之不遠。又曰、辭達而已矣。夫言止於達意、卽疑若不文。是大不然。求物

之妙、如繫風捕影、能使是物了然於心者、蓋千萬人而不
一遇也。而況能使了然於口與手者乎。是之謂辭達。辭至
於能達、則文不可勝用矣。（「答謝民師書」蘇東坡集後集
卷十四）

行雲流水に似て、固定した形をとらず、自由に自然に、
行くべき所に行き、止まるべき所に止まつて、文意は素直
に、描寫は生き生きとしているものが蘇軾の善しとする詩
文の様式であつた。死の前年、六十五歳の蘇軾が説くこの
論は、二十四歳の時の「南行集」序に説く論と同一線上に
ある。右の論は謝舉廉の詩文に對する評であるとともに、
蘇軾の持論であり、自己の理想とする詩文の評でもあつた
ことは、「吾文如萬斛泉源、不擇地皆可出、在平地滔滔汨
汨、雖一日千里無難及、其與山石曲折、隨物賦形、而不可
知也、所可知者、常行於所當行、常止於不可不止、如是而
已矣、其他雖吾亦不能知也」（「東坡題跋」卷一）という
「自評文」によつて知ることができる。

泉のあふれ出るような内面の流露は、流水が物に随つて
形を成すように、「耳目に接する所の者と、雜然として中
に觸れ、詠歎に發する」ところから詩文が生まれると蘇軾
は考えている。したがつて、作品の發想及び構成さらに言
えばことばさえも自然に流れながら抑揚・行止を形づく

れるということにならざるをえない。

また文章を流れに譬えるならば、それは或る所に流れ到
るものつまり「達意」の譬喩ということにもなる。蘇軾は
孔子の言を引いて、「辭は達するのみ」つまり文章は意志
を傳達できればそれでよいという考え方を基本的には肯定
する。しかし一方で孔子はまた、「言の文あらざるは、之
を行うこと遠からず」とも言っている。このことばに裝飾
がなければ、時間的にも空間的にも遠くまで傳達されない
というのもまた一面の眞理である。蘇軾はあくまで達意に
基本を置きながら、それに適度の裝飾を加えるという兩者
の統一を、ことばによつて外在化する以前の「物を求むる
の妙」つまり對象物を的確につかみうる能力においてなそ
うとした。しかしそれは彼自身が認めるように、風をつな
ぎとめ光を捉えるようなきわめて難しいものであり、まし
て、對象物の心をことばによつて人の心にはつきりと分か
らせることができる者は、千人萬人に一人もないのであ
る。したがつて、蘇軾の説く達意は、選ばれた能力の人、
いふなれば士大夫たちのみに可能な文章表現の謂であつた
ということになる。こうした高踏的な論は、蘇軾の藝術論
に常に見られるものであり、彼の文學の特質を形成する一
側面でもある。

それではこうした蘇軾の文學觀はどのようにして形成されたのか。當然この點が次に問題となる。蘇軾は前述の序文において、父からそれを幼い時より聞いたと言う。しかし蘇洵がどのような文學觀を持ち、どのような言葉で二人の息子に教えたのかは、今は詳かにしえない。思うに蘇軾の文學觀の形成は、彼の資質、家庭の文學的環境、中央文壇の影響などがからみあつてなされたものであらう。

紙幡の關係で、ここにその一一を詳しく述べることはひかえるが、蘇軾の家系には父以前に官吏や文人はいないことは注意しておいてよい。蘇洵の書いた族譜によれば、任俠をもつて知られた先祖の中で、洵の父の序だけが晩年に詩を作っている。その詩は、多様な素材をたちどころに詠い上げる多作かつ速成の詩で、^{〔注2〕}工ではないが物の表裏を洞察している^{〔注2〕}と蘇洵は批評している。蘇序は軾が十二歳の時まで生きていたから、軾は祖父の詩を見る機会があつたであらうし、また詩作の手ほどきを受けた可能性も考えられる。さらに文章家として知られる蘇洵は、「發於其心、出於其言、見於其事、確乎其不可易也、聖人不得以與人、父不得奪諸其子」(「上田樞密書」嘉祐集卷十)という精神・言語・行爲における個性を重んずる立場をとり、獨創的な思想を達意の文章に載せた。蘇軾はこうした父祖から

その文學的資質を與えられ、自から深めていつたのである。

時に中央の文壇では歐陽修が孟軻と韓愈の文を規範として古文運動を提唱していた。歐陽修は知貢擧となつたとき、當時流行の太學體の文章によつた答案を斥け、達意の文章による答案のみを合格させて、いささか強引なり方で古文流行の道を開いた。その時の合格者の一人が蘇軾であつた。蘇軾は試験官であつた梅堯臣への謝狀の中で、自分の進士合格は全く文章の出来ばえの良さによると自負し、梅堯臣に孟軻の風があると認められ、歐陽修もまた駢文體の世俗の文でないことから自分の文章を評價されたと聞くが、それこそ自分の文章の長所であるとして^{〔注3〕}いる。蘇軾が蜀の地方文化の中で身につけてきた文學が、中央の文壇の趨勢と一致したことによつて、大きな進展を見せたのである。

三

これまで、蘇軾の「南行集」の序に述べられた文學觀の内容とその形成について検討してきたが、そこに言われた「文」は、南行集の内容からいえば「詩」と置きかえることが可能である。蘇軾は序文の後段で、これらの作品は、船中のつれづれを慰めるために、自然の美景、純朴な風俗、

先賢の遺跡などに觸發されて自己の内面が自然に流露したものであり、「談笑の間に得て、勉強して爲る所の文に非ず」という點を、この作品群の長所としている。序文に見る限りでは集中の作品も前述の文學觀に律せられていることになるが、作品自體の特色はどうであらうか。

「南行集」に収めた作品は、父子三人で凡そ百首と序文に言うが、現在見られるものは、それぞれの別集から拾つても、蘇軾は四十二首、轍は二十三首、洵は一首の計六十六首だけである。蘇轍の詩二十三首の内、二十一首の詩は軾の詩と同じ題がつけられているし、軾には「涪州得山胡次子由韻」のように轍の詩（現存しない）に次韻したものがあることから考えると、同じ題材について父子三人で競作したもののがほとんどすべてであつたと思われる。「南行集」が「江行唱和集」とも呼ばれる所以である。ただ蘇洵は、「吾後漸長、亦稍知讀書、學句讀・屬對・聲律、未成而廢」（「送石昌言使北引」嘉祐集卷十四）と自から言うように、詩を得意としなかつたし、現存する「遊三游洞」の一首も、「洞中蒼石流成乳、山下寒溪冷欲氷、天寒二子苦求去、吾欲居之亦不能」といつた平凡な作である。おそらく蘇洵の詩は數も少なかつたであらうが、早く散逸し、蘇轍の詩の一部も同様に逸詩となつたものであらう。詩人とし

て名をなした蘇軾の詩だけは、四十二首はほ完全に残つたものと考えられる。

さてそれらの詩は、嘉州から江陵までの間に、限られた素材について詠われたものである。素材的に分類すれば、序に言うように、山川の風景、土地の風俗、先賢の遺跡の三つに大別される。素材の範圍も狭く、かつ作詩の場も船中か名所古蹟の遊覽の時に限定されているために、それらの詩の特色も限定されてくるが、以下に素材・形式の異なる作品を對象として、その發想と表現の特色を考えてみる。部分的に引用する詩もすべて「南行集」のものである。

江上看山

船上看山如走馬	船上より山を看れば走馬の如し
倏忽過去數百羣	倏忽にして過ぎ去る　數百群
前山槎牙忽變態	前山は槎牙として忽ち態を變じ
後嶺雜沓如驚奔	後嶺は雜沓して驚き奔るが如し
仰看微徑斜繚繞	仰ぎ看れば微徑　斜めに繚繞とし
上有行人高纒縵	上に行人有り高きこと纒縵たり
舟中舉手欲與言	舟中より手を舉げて與に言はんと欲するも

孤帆南去如飛鳥

孤帆　南に去ること飛鳥の如し

この詩は三峽のあたりの船中で詠つたものである。このコースの船旅は蘇軾には始めての経験であり、かつ「入峽喜巉巖、出峽愛平曠、吾心淡無累、遇境即安暢」(出峽)というようなおおむね快適な旅であつた。したがつて山水の景を詠つた詩には、眼前に展開する風景に對する蘇軾の新鮮な感動が示されている。

右の詩は平仄及び換韻から見て七言古詩であるが、七言律詩のような輕快なリズムが感じられる。それは倏忽 shū·hū という入聲を重ねた語や、槎牙 chaya·雜沓 zata·繚繞 liáo rao·縹緲 piào miǎo といった疊韻語を多用することによつて、長江の急流を思わせるような輕快なリズムを構成しているからである。五字目に三度くりかえされる如こもリズムに効果を與えている。近體の詩ではこうした聲律は野暮なものとして斥けられるであらうが、格律に拘泥せず、いわば自然に口をついて出る内在的な聲律をそのまま詩語に定着させたような、無技巧の技巧が蘇軾の詩の特色となつている。彼の詩では近體も古體風な措辭が多いが、こうした傾向は、この初期の作品にも既に現われているといえる。

南行集の詩はほとんど古體であるが、次に引く近體の措辭は前に引いた古體の詩と同様である。

望夫臺

山頭孤石遠亭亭、
江轉船回石似屏

山頭の孤石 遠く亭亭たり
江 轉じ 船 回りて 石は屏に似たり

可憐千古長如昨、
船去船來自不停

憐む可し 千古も長さ昨の如し
船去り船來たりて自から停まらず

浩浩長江赴滄海、
紛紛過客似浮萍

浩浩たる長江 滄海に赴き
紛紛たる過客 浮萍に似たり

誰能坐待山月出、
照見寒影高伶俚

誰か能く坐して山月の出づるを待ち
照らし見ん 寒影の高くして伶俚たるを

この七律には疊韻語は伶俚 líng pīng の一語しかないが、代りに亭亭 tīng tīng・浩浩 hào hào・紛紛 fēn fēn の疊語が用いられ、江轉船回 jiāng zhuān chuán huí・船去船來 chuán qù chuán lái などの通俗的なリズムが輕快な聲律を構成している。疊語の使用は、「山前江水流浩浩、山上蒼蒼松柏老、舟中行客去紛紛、古今換易如秋草」(留題仙都觀)のように彼の古體の詩に多く見られるものである。

以上は用語の特色の一つであるが、更に後の詩につながる特色としては譬喩それも直喩の多用がある。「江上看山」

の詩について見ると、「如走馬」・「如驚奔」・「如飛鳥」と八句の中に三個所使われている。これらは、それだけを取り出せば平凡な用語であるが、詩句の中では實に有機的に機能している。「船から見ると山は疾走する馬のように、たちまちに數百の群となつて後方に過ぎ去つて行く」と、船足の速さを言わず山が駆け去るという童心的發想、それだけに詩では新鮮であり奇拔である發想を「如走馬」の語は示しているのである。「如驚奔」は、それをより強調するべく動詞を用いて譬喩をダイナミックに生かしている。最後の「如飛鳥」に至つてはじめて船の速さの直喩として常識的な用法にもどしているが、これも山上の行人に手をふつて話しかけようとする奇抜な發想と結びつくことによつて常識的な直喩以上の効果を上げているのである。「望夫臺」の詩にも「似屏」・「如昨」・「似浮萍」とやはり三個所に直喩が見られる。たとえば、「過客がただよう萍のようだ」という常識的な直喩のようである、そこには山上から見下した水面を往來する旅人のイメージが重ねられて効果を高めているように、これらの直喩もやはり非凡な發想の表われとしてある。

こうした直喩の多用は、景物の把握の仕方における蘇軾の特異さを示すものである。彼はたとえば、「合水來如雷、

黔波綠似藍、餘流細不數、遠勢競相參、入峽初無路、連山忽似龍、縈紆收浩渺、盛縮作淵潭、風過如呼吸、雲生似吐含」(入峽)のように直喩を多用しながら川の音や色、山の形、風や雲の動きを的確にイメージ化することによつて、景物の生動するいぶきを把握しかつ表現している。蘇軾は自然の景物を小さくまとまつた美の一片として切り取ることをしない。自己の發想による自由な觀察を通して、自然の生動する生命力の核心ともいふべきものをつかみ出してこようとする。自然の景物をダイナミックに總體的に把握して詩文に表出するのが蘇軾の文學の一つの特色となつてはいるが、その姿勢は最初期のこれらの詩に既に認めることができるのである。

詩の評價の基準を、萬物の存在に關する新しい發見という根源的な知覺力と、言語の美の新しい構成という詩の構造性の二つに置くとすれば、蘇軾の詩はより多く前者によつてその評價を得るであらう。たとえば「江上看山」の詩の第二句「倏忽過去數百羣」は、杜甫の「前出塞」九首の其五、「隔河見胡騎、倏忽數百羣」を譬喩的に表現しなおすことによつて、換骨奪胎したものである。單に古人の詩句を模倣あるいは襲用して表現を整えるのではなく、彼の詩の獨自な目的に古人の詩句を奉仕させている所に、蘇軾

の詩法の特徴がある。それは前述の二基準における前者を彼自身が詩の本質的なものと意識していたからにほかならない。

上述のような蘇詩の特徴が、當時の宋詩に一般的なものではなく、蘇軾の個性を示すものであつたことは、同じ時、同じ場所で作られた蘇轍の詩と比較すれば分かる。

江上看山

蘇轍

朝看江上枯崖山

朝に看る 江上 枯崖の山

憔悴荒榛赤如赭

憔悴せる荒榛 赤きこと赭の如し

暮行百里一回頭

暮に行く 百里 一たび頭を回らせ

落日孤雲靄新畫

落日 孤雲 靄 新たに畫く

前山更遠色更深

前山 更に遠く 色更に深し

誰知可愛信如今

誰知ざりき愛す可きは信に今の如き

唯有巫山最穠秀

唯 巫山の最も穠秀なる有りて

依然不負遠來心

依然 遠來の心に負かず

この詩は蘇軾の「江上看山」の詩と同じく七言古詩の形式で詠われているが、疊語や疊韻語はなく、直喩も「如赭」という單純な色の強調一つだけである。冬山の夕暮の美しさが彼にとつての新しい發見としてスタチックにきち

んと扱えられ表現されていて、それなりに蘇轍の謹直な個性を示すものといえるけれども、蘇軾のような自由奔放な發想の面白さと、躍動するリズム感は認められない。

四

次に土地の風俗を詠つた五言古詩を引いて蘇軾の詩の構成の特色を検討する。

夜泊牛口

日落江霧生

日 落ち 江霧 生ずるとき

繫舟宿牛口

舟を繫ぎて牛口に宿す

居民偶相聚

居民 偶たま 相聚まり

三四依古柳

三四 古柳に依る

負薪出深谷

薪を負ひて深谷より出で

見客喜且售

客を見て喜び且つ售る

煮蔬爲夜殮

蔬を煮て夜殮を爲す

安識肉與酒

安んぞ肉と酒とを知らんや

朔風吹茅屋

朔風は茅屋を吹き

破壁見星斗

破壁に星斗を見る

兒女自咿嚶

兒女 自から咿嚶す

亦足樂且久

亦た樂しんで且つ久しうするに足れり

人生本無事

人生 本 事無し

苦爲世味誘

苦はだ世味の爲に誘はる

富貴耀吾前 富貴 吾が前に耀けば

貧賤獨難守 貧賤獨り守り難し

誰知深山子 誰知^{はから}ざりき 深山子の

甘與麋鹿友 甘んじて麋鹿と友たることを

置身落蠻荒 身を置きて蠻荒に落とすも

生意不自陋 生意 自から陋^{つたな}しとせず

今予獨何者 今 予^{われ} 獨り何者ぞ

汲汲強奔走 汲汲として強ひて奔走す

詩はまず、日暮れて牛口の岸に舟を繫いだという、ごく普通の状況説明で詠い起こされている。岸邊に集まつた土地の住民たちは、古柳によりかかつて船を見物しているのである。中には山から薪を背負つてきて船の人に賣つている者がいる。平凡な寒村の淡々としたスケッチである。彼等は野菜を煮て晩飯の代りにし、酒や肉の味も知らず、北風の吹きつけるあばら屋に住んで、壁の穴から星を数えるような貧しい生活と、蘇軾は想像しながら詩句を續ける。

こうした寒村に貧しい生活営みながらも、兒女はペチヤクチャとおしやべりし、日常を楽しむことを知っている。かく足るを知れば、人間の生活は平穩無事なはずである。しかし人は様々な欲望を持つ故に、世間の名利に誘わ

れ易く、かえつて苦しみを嘗めることとなる。この第十三・四句は觀念的にこの詩のテーマを提示したものである。こうした句を詩中に置くのは、「古來人事盡如此、反覆縱橫安可知」（昭君村）の例に見るように、蘇軾の好む句法である。

蘇軾自身は、貧賤に甘んじられず、進士の試験を受けて既に三年前に省試及び殿試に合格している。この旅を終えて都に着けば官職は約束されているのである。意氣こんで都に上る途次、思いがけず深山に住む人が南蠻の地で生氣あふれる超然とした人生を送っていることを知つた。それに較べて、富貴を求めるために奔走している自己の生き方ははたして價值あるものであろうか。詩はこうした感慨によつて結ばれている。

この詩の構成は、後に古體の詩で蘇軾がよく使う一つの型を既に示している。それはまず景物を敘してその連想からある人間の生活態を設定し、觀念的な句つまり説理の句を挿入した上で、先に提示した生活態と自己のそれとを對比し、多くは自己の生活を否定しつつ感慨を示して詩を收束させる篇法の型である。

蘇軾は、景物に觸れて心が動かされた場合、景物をおおむね彼の感懷を導き出す迎え水のなものとして詩に部分的

に示すだけである。この場合の景物は自己の心を詠い出す契機としてあるに過ぎない。対象を熟視し、対象そのものが持つ意味のみを抽出するという發想はこれらの詩には見うけられない。そこに詠われるものはおおむね対象に移入された自己の心であつた。

またそこに詠われる心は現實とぶつかりあつて内面にきしめく葛藤や苦惱の表出という形では示されない。それらは一度心の奥底に沈められて、平靜におおむね高踏的に觀念のものとして表出されている。たとえば「蠻荒誰復愛、禮秀安可適、豈無避世士、高隱鍊精魄、誰能從之游、路有豺虎跡」(過宜賓見夷牢亂山)の詩句が高人逸士の風を憧憬する心の表明であるように。

いま一度、比較のために同じ時の蘇轍の詩を見てみよう。

夜泊牛口 蘇轍

行過石壁盡 行きて過ぎれば 石壁 盡き

夜泊牛口渚 夜 泊す 牛口の渚

野老三四家 野老 三四家

寒燈照疎樹 寒燈 疎樹を照らす

見我各無言 我を見て 各々言無く

倚石但箕踞 石に倚りて 但だ箕踞す

水寒雙脛長 水寒うして 雙脛 長く

壞袴不蔽股 壞れし袴は股を蔽はず

日暮江上歸 日暮れて江上より歸るに

潛魚遠難捕 潛魚は遠くして捕え難し

稻飯不滿盂 稻飯は盂に満たず

飢臥冷徹曙 飢えて臥せば冷さ曙に徹る

安知城市歡 安ぞ知らん 城市の歡

守此田野趣 此に守る 田野の趣

祗應長凍飢 祗 應に長に凍飢すれば

寒暑不能苦 寒暑にも能く苦しまざるべし

この詩における詩人の關心はあくまで土地の人々の生活にある。したがつて詩には岸邊の老人たちの貧窮の姿が細かくリアルに描寫され、野老の姿から貧しい日常の飢寒を思い述べて言外に深い同情が寄せられている。詩の構成も措辭も傳統的な古詩のスタイルであり、きちんと整っている。内容もあくまで現實的である。それだけに常識的であり新しさに乏しい。この詩と對比すれば、蘇軾の詩には、發想の自由さ思考の奔放な伸長と飛躍があり、それが表現にも伸長と飛躍をもたらし、常識的な詩法の殻を破る新しさとなつていたのである。

最後に先賢の遺跡を詠った詩における説理の仕方を見
みる。この時の詩では寺・觀・樓・廟・碑・塔など遺跡を
詠った詩が過半を占めており、山水の美景がこれにつき、
土地の風俗を詠ったものが一番少ない。遺跡を詠った詩も
素材の多様さによつて内容も多様であるが、そこに共通し
ていることは、遺跡に對する自己の判斷を述べ、さらに理
を説いて詩を結ぶことである。

屈原塔

楚人悲屈原	楚人	屈原を悲しみ
千載意未歇	千載	意 ^{こころ} 未だ歇 ^や まず
精魂飄何處	精魂	飄として何れの處ぞ
父老空哽咽	父老	空しく哽咽す
至今滄江上	今に至るも	滄江の上
投飯救飢渴	飯を投じて	飢渴を救ふ
遺風成競渡	遺風	競渡を成し
哀叫楚山裂	哀叫して	楚山裂く
屈原古壯士	屈原は古の壯士	
就死意甚烈	死に就く	意甚だ烈なり
世俗安得知	世俗	安んぞ知るを得ん
眷眷不忍決	眷眷として	決するに忍びず
南賓舊屬楚	南賓は舊と楚に屬す	

山上有遺塔	山上に遺塔有り
應是奉佛人	應 ^{まさ} に是れ佛を奉ずる人の
恐子就淪滅	子が淪滅に就くを恐れしならん
此事雖無憑	此の事憑 ^よ るところ無しと雖も
此意固已切	此の意固 ^{もと} より已に切なり
古人誰不死	古人誰か死せざらん
何必較考折	何ぞ必ずしも考折 ^{かんが} を較へん
名聲實無窮	名聲實に窮り無し
富貴亦暫熱	富貴亦暫く熱す
大夫知此理	大夫此の理を知る
所以持死節	所以 ^{ゆゑ} に死節を持す

詩の前段では、屈原を追慕しその水死を悼む楚の人々が食物を川に流し、また舟を競う風習をもつて屈原を弔うことを述べながら、それは壯士屈原が死をもつて示した烈しいところにそぐわないものだという自己の判斷を示している。後段も同様の論法で、この南賓（忠州、今の四川省忠縣）の地に屈原を紀念する塔が建てられていることへの疑問と、塔を建てた人の心情は分かるが、それは屈原の死節を持した所以と合致しないとの判斷が示されている。またそこには、誰もが必ず迎える死についてその吉凶をかんがえることはいらぬとの理^{ことわり}が述べられている。

題詠の詩でありながら、塔そのものについて形状を述べ

ることをこの詩では全くしていない。塔の存在は彼の考えを述べる契機となつていただけである。事物によつて想像を展開し、理をもつて蘇軾自身の判断を示すのは、彼の古體の詩に基本的に流れる發想の型であるといえる。

詩が本質的に敘情の具であり、思想をも情緒化して表現すべきものとすれば、右のような生まな説理の詩は批判を受けることとなる。「詩有別趣、非關理也」とする立場をとる嚴羽は、「近代諸公、乃作奇特解會、遂以文字爲詩、以才學爲詩、以議論爲詩、夫豈不工、終非古人之詩也」

(『滄浪詩話』・詩辯)とそうした傾向を批判している。し

かし蘇軾は詩を主情的に生産することを斥けてあくまで主知的に生産しようとした。したがつて、主情的な立場から見ればマイナス價である才・學・理の表出を、彼は積極的にプラス價に轉じてそこに唐詩と異なる新しい詩の世界を開こうとしたのである。これはまた、文學を内面の自然な流露とする蘇軾の文學觀からすれば、必然的な彼の詩ひいては宋代士大夫たちの詩の方向であつた。

蘇軾が二十四歳の時の詩に作品としての完成度を求めるのは無理であるが、少くともこれまで述べてきたような彼の文學の方向性は既に示されており、これらの作品は蘇軾

の詩の原點を示すものとしての意義を有するものである。

(本學 專任講師)

注1 この題は「蘇東坡集」卷二十四による。「經進東坡文集事

略」卷五十六では「江行唱和集」となっている。文中に「謂之南行集」の語があるから、「南行集」というのが最も原形に近いであろう。あるいは江陵から都までの作品を後集として編む意圖のもとにつけられた題とも考えられる。

注2 蘇洵の「族譜後錄」下(嘉祐集卷十三)に「凡數十年得數千篇、上自朝廷郡邑之事、下至鄉閭子孫敗漁治生之意、皆見於詩、觀其詩雖不工、然有以知其表裏洞達豁然偉人也」と見える。

注3 「上梅直講書」(蘇東坡集卷二十八)

注4 蘇軾の詩は「蘇東坡集續集」卷一に見え、詩集の合註本・編註集成本も卷一に、施注本は補遺の卷上にまとめて收められている。蘇轍の詩は「樂城集」卷一にまとまっているが、蘇洵の詩は「嘉祐集」には見當らず、查慎行の補註になる「東坡先生編年詩」卷一に附蘇詩として一首收められている。

注5 蘇轍の詩が現存のものより多かったことは、軾に「次子由韻」の詩が二首あるのにいづれも轍の原詩が残っていないこと、轍の詩題で軾に無いものは「江上早起」「白鵬」の二つだけであり、他の題の重なりからみて、軾のみに現存している二十二首の主に遺跡をうたった詩と同じ素材の詩が轍にも

あつたと思われることによる。

注 6

當時、蘇軾が詩における譬喩に關心をもっていたことは、「江上値雪、效歐陽體、限不以鹽玉鶴鶯絮蝶飛舞之類爲比、仍不使皓白潔素等字、次子由韻」と題する詩を見ても分かる。なお、雪の譬喩及び形容に用いる語をあらかじめ制限しておいて詠雪の表現を競うのは一種の遊びであるが、題詠の詩には常に遊びの側面がある。そして蘇軾の詩は生涯を通じて遊心の意をも含むあそびを基調としているのである。「南行集」の詩が作られた場の型がこれ以後にも繼承されて、おうむねはそうした文人交歓の場で詩が作られていくことがその背景としてある。そうした場の自由な雰囲気やあそびどころが自由な發想を生んだことも見落とせないであらう。